その器をもって祀られる祖先の名を金文として記した西周青銅器は少なくない。ここで取りあげた字数50字以上の金文を持つ西周青銅器も，そのほとんどが用いて祀る祖先の名を記している。まえの殷時代の青銅器も主に祖先祭祀に用いられた。

こうした祖先祭祀とのつながりを追っていくと注目されるつぎのような事実に出遭う。

この小文の冒頭に述べた殷時代の甲骨文によれば，殷の王室では，王室の今は亡き祖先たちに対して，数々の祭祀をおこなうとともに牛と羊を代表とする動物を犠牲として捧げていた。たとえば

「貞う。御するに牛三百」

「癸巳貞う。父丁に御するに，それ五十小宰」

『史記』の周本紀によれば，西周王朝をひらいた周族の始祖は后稷といい，農耕を好んだ。

「周后稷，名弃。……其游戯，好種樹麻……及為成人，遂好耕農……」

以上２つの事実こそ，鼎と𣪘がそれぞれ西周青銅器の中で特に重んじられたことの有力な理由と考えてよいのではなかろうか。

殷時代の王室および貴族における祖先祭祀重視の伝統は，西周時代の王室および貴族に受け継がれた。金文から明らかなところである。その際，牛や羊の肉は祖先祭祀に欠かせない供献の食物として受け継がれたのであろう。そこで，鼎は西周時代において重んぜられた。

祖先祭祀の重視ということから，西周王室と貴族のあいだでは，周族の始祖の后稷への尊崇の表明として祖先祭祀への穀物の供献が大事とされるに至り，これが𣪘の重用となったのであろう。

出土した点数からみると，殷時代において，鼎は西周時代と同じく数ある青銅器の器種の中で多くつくられた部類に入るが，𣪘は入らない。西周時代の𣪘に当たるのが殷時代では爵や觚といった酒器である（前掲郭氏著書の表一～表五）。

**おわりに**

西周金文と青銅器この両者の関係は，なかなかつかみどころがない。しかしながら，西周青銅器を知るためには西周金文に目を向けずには済まない。この小文では，ひとまず西周金文を極めて単純なかたちで取り上げてみた。今後，さらに詳しく西周金文と青銅器との関係を追究してみたい。

最後に断わり書きを一つ。この小文では繁瑣になるのを避ける目的から西周青銅器で通したが，正確には，この小文で論じたのは西周青銅器の中の青銅彝器である。

**参考文献**

白川静『金文通釈』（「白鶴美術館誌」第１輯～第56輯　白鶴美術館　1962年～1984年）

郭宝鈞『商周銅器群綜合研究』文物出版社1981年

**挿図出典**

第1図　甲骨文　郭沫若『卜辞通纂』　科学出版社　1983年　第七三五片

金　文　上海博物館『上海博物館蔵青銅器』　1964年　53．師寰𣪘

第2図　同　上　29．大盂鼎

第3図　上　同　上　34．無　名

下　同　上　56．虎　𣪘

（７班・佐倉第三事務所）

# 佐原市大倉発見の平安時代火葬墓について

鈴　木　文　雄

## 1．はじめに

ここで紹介する資料は，1984年12月に佐原市大倉の梨畑で土地所有者の鎌形甚一郎氏が耕作中に発見し，近隣の藤株台遺跡で調査をおこなっていた筆者が記録した平安時代火葬墓の報告である。

## 2．位置と地形（第１図，第２図１・２）

出土地点は佐原市大字大倉山毛（さんげ）2226－４の梨畑で，佐原市の中心部から東へ約５kmの位置にある。利根川下流に面した樹枝状台地の南東斜面近くの平坦面（標高41ｍ）に位置する。

**3．周辺の奈良・平安時代の遺跡等**（第1図）出土地点の近くには山毛（さんげ）貝塚・大倉南貝塚などの縄文時代の遺跡（註1）・古墳時代後期の側高遺跡（註2）などがあるが，現在のところ奈良・平安時代の遺跡は発見されていない。

しかし，出土地点の北約400mには香取神宮第一の摂社といわれる側高神社（註3）・西南西約2.7kmには式内社の大社香取神宮・南西約2.3kmには香取神宮との関係が注目されている平安時代集落跡の吉原三王遺跡（註4）などがある。

**4．出土状態**（第3図）

図のように骨蔵器はほぼ南北に2個体とも正位安置されていた。骨蔵器を埋納した土壙は鎌形氏が遺物発見時に掘ったものであるが，甕の大きさ・表土の厚さと甕の残存高の関係から判断して本来の土壙の規模と大差ないであろう。甕の胴部下半以下は，II層（新期テフラ）を掘り込んだ土壙中から，胴部上半はI層（耕作土）中から出土しており，内部には火葬骨が入っていた。蓋は甕の破片とともにI層中から出土しており，セットを成していたと思われる。小型甕はII層中に浅く掘り込まれた土壙に埋納されており，内部には火葬骨が入っていた。骨蔵器の周囲を木炭で囲う例があるが，ここではみられなかった。他にI層中からは刀子と思われる鉄製品・別個体の甕の胴部下端から底部にかけての小破片・甕の口縁部の小破片が出土している。

**5．出土遺物**

**土師器　蓋**（第2図3・第4図1）

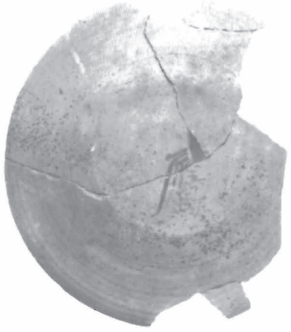
遺存度は全体の約3/4，器高3.2cm，天井部径8.7cm，口唇部径18.9cmを計る。ロクロ成形。つまみは持たない。口縁端部の下方への屈曲は比較的明瞭。調整は，外面天井部が回転糸切りの後手持ちヘラケズリ，体部上端が手持ちヘラケズリ，それ以下の体部がロクロメ。内面がロクロメ。胎土は密。焼成は良好。色調は外面が赤褐色，内面が明褐色。天井部に「鷹」の墨書がある。

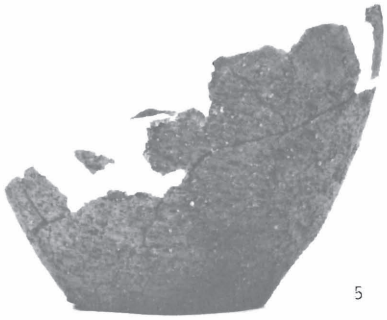
**土師器　甕**（第2図4・第4図2）

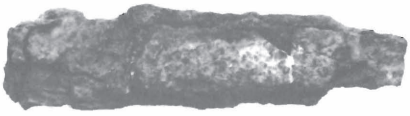
「下野型」と呼ばれる甕で胴部上半から上を欠損する。残存高23.7cm，胴部上半に最大径（25.7cm）を持つが，胴部の張りは弱い。底径9.0cm。調整は外面胴部上半がナデ，胴部下半がナデの後縦方向の緻密なミガキ，底部がナデ，内面がヘラ（3.5cm幅）ナデの後ナデ。胎土は密だが，直径1mm前

第1図　位置と周辺の地形

1　出土地点　2　側高神社
3　香取神宮　4　吉原三王遺跡

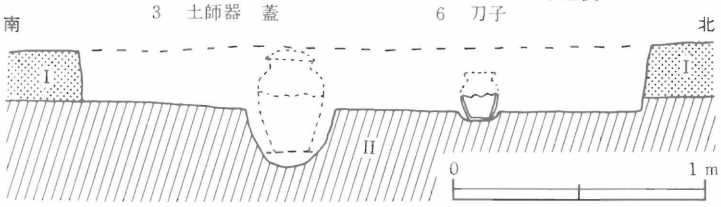





**第2図**　出土地点と出土遺物

1　出土地点遠景（北より）
2　出土地点近景（東より）
3　土師器　蓋
4　土師器　甕
5　土師器　小型甕
6　刀子



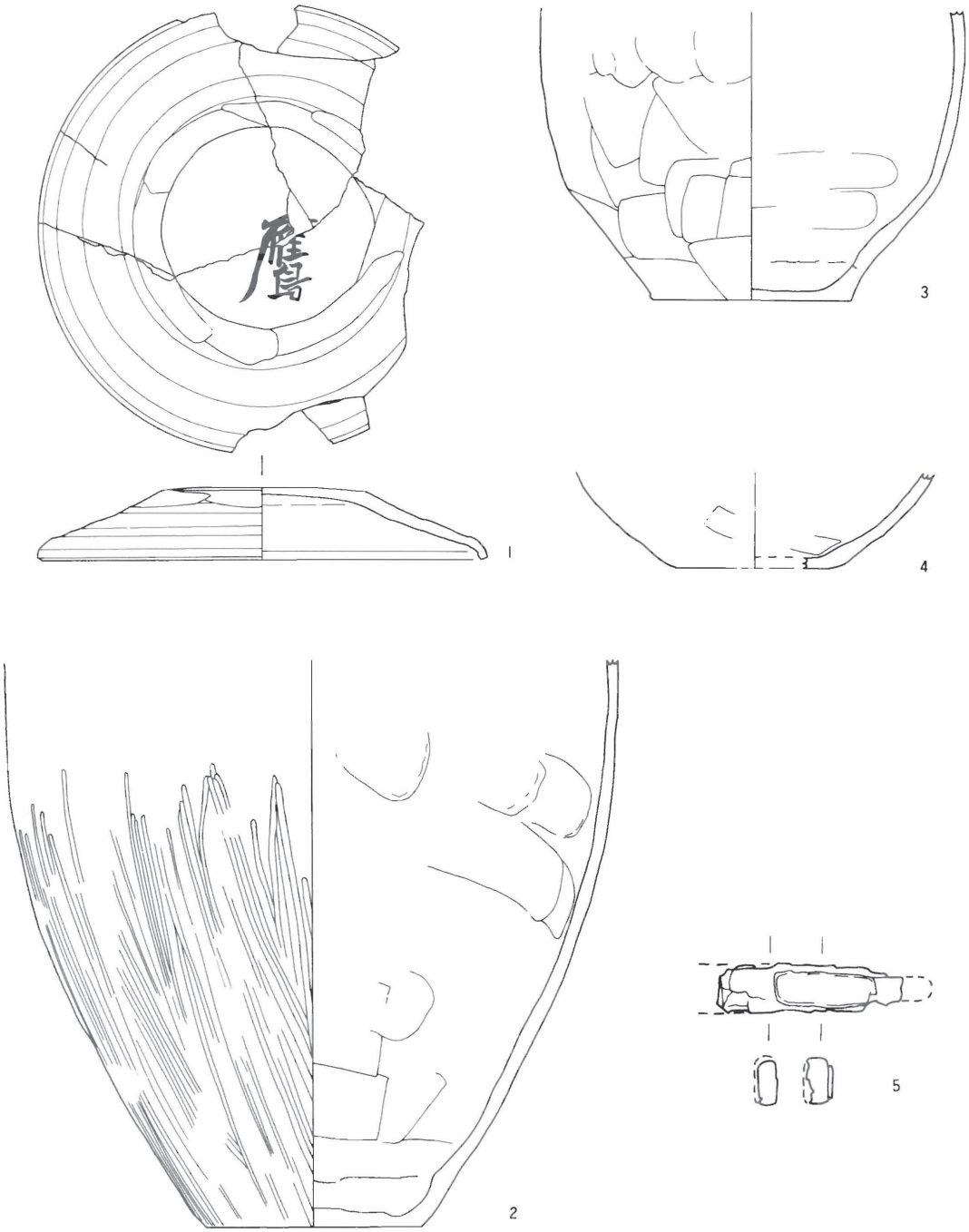

**第3図**　遺物出土状況

I　表土層
II　新期テフラ層

後の長石粒がやや多い。

**土師器　小型甕**（第２図５・第４図３）

胴部上半から上を欠損する。残存高12.0cm，胴部はほぼ球形を呈し最大径18.0cm，底径8.3cm。調整は，外面胴部下半に横方向のヘラケズリの後，胴部上半にオサエ気味の指ナデ，底部が荒いナデ，内面がナデ。胎土に直径１mm前後の長石粒を多量に含む。焼成は良。色調は明褐色。




**第４図**　出土遺物　　１～４（1/3）　５（1/2）

**土師器　小型甕**（第４図４）

胴部下端から底部にかけての小破片。底径は3.7cm(推定)。調整は，外面胴部下半と底部がヘラナデ，内面がヘラナデの後ナデ。胎土は密。焼成は良好。色調は赤褐色。

**刀子**（第２図６・第４図５）

刀子の中子の破片と思われる。残存長5.4cm，幅1.3cm，厚さ0.7cm（推定）で片面に厚さ0.1cmの鉄片が重なっているため全体の厚さは0.8cm（推定）を計る。

**火葬骨**

２体分とも一握り程の量の骨片・骨粉である。

## ６．まとめと今後の課題

**遺物**

土師器は９世紀前半のものと思われる(註５)。北総・東総地域の奈良・平安時代の火葬墓としては印旛郡安食町の龍角寺ニュータウン遺跡群の火葬墓群が８世紀末葉から９世紀中葉(註６)，印旛郡印西町大字浦部字宮内宮後出土の骨蔵器が平安時代(註７)，印旛郡富里村古込の火葬墓が平安時代末期ないし鎌倉時代初期(註８)，香取郡多古町の多古工業団地用地内の遺跡群発見の火葬墓群が８世紀後半（註９)，とされている。

土師器蓋の墨書「鷹」であるが，前出の側高神社は往時の記録および棟札などには「曽場鷹」・「脇鷹」・「脇高」などと記されていることは（註10)，側高神社との関係も連想させるが，資料の乏しい現時点では言及をひかえたい。

火葬墓に刀子が副葬された例は僅かであるが，県内では富津市桜井の火葬墓出土のもの(註11)があげられる。刀子の副葬については被葬者が「木簡などに墨書した文字の切削のような行為」をおこなっていたことも想定できるが(註12)，民俗例などから死霊の穢れを払う意味の葬法の一種かとも思われる。

火葬骨は僧侶あるいは在地信者等の仏教に関連した人間のものと思われるが，現在のところ未鑑定のため，性別・年齢等は不明であり，今後の鑑定結果に期待したい。

**遺構**

埋納された骨蔵器の復元推定レベルに対して現地表面のレベルが低いことは(第３図)，当時の地表面のレベルが現地表面よりも高かったか，骨蔵器埋納土壙の上にマウンドを築いていた可能性が考えられる。

これまでの古代火葬墓の調査例の多くは，墓域が複数の墓（骨蔵器・石櫃)より形成されていることを示しており，今回の遺物出土箇所も墓域の一部と思われる。また墓地に対して火葬跡の位置も問題になるであろう。今後の本火葬墓周辺の奈良・平安時代の集落・寺院等の発見を期待したい。

## ７．終りに

今回発見した出土遺物等は佐原市教育委員会に保管をお願いした。遺物の保管等について心良く御理解をいただいた鎌形甚一氏に厚くお礼申し上げます。

**註**

１）佐原市教育委員会『千葉県佐原市埋蔵文化財分布地図』　昭54．３
２）千葉県文化財センターが昭和59年度に調査した。
３）「下総式社考」・『房総叢書』　昭34所収
４）池田大助他「佐原市吉原三王遺跡出土遺物について」『研究連絡誌』７・８　昭59．３　栗田則久「佐原市吉原三王遺跡出土の墨書土器について」『研究連絡誌』10　昭59．12
５）越川敏夫・長内美知枝「下総東部における奈良・平安時代の土器編年試案」『房総における奈良・平安時代の土器』　昭58．10
６）龍角寺ニュータウン遺跡調査会『龍角寺ニュータウン遺跡群』　昭57．９
７）野村幸希「南関東」『新版仏教考古学講座』７　昭50．９
８）越川敏夫・林勝則「印旛郡富里村古込発見の火葬墓」『史館』13　昭56．12
９）千葉県文化財センターが昭和56年度から昭和58年度に調査した。現在整理作業中で，三浦和信氏の御教示による。
10）佐原市役所『佐原市史』　昭41．３　「角川日本地名大辞典」編纂委員会　竹内理三「角川日本地名大辞典」12　千葉県　昭59．３
11）註７に同じ
12）村田文夫・増子章二「南武蔵における古代火葬骨蔵器の一様相」『川崎市文化財調査集録』15　昭55．２

（６班・空港南部事務所）